

帝キネ小阪映畫

紹介(前篇)

脚色者(後篇)

監督者(同)

撮影者(同)

——主要役割——

第百九十七號

新穂司氏

山下秀一氏

吉田俊作氏

下川逸平 尾上紋十郎氏

(其他は前篇と同じ第百九十七號參照)

(後篇略歎) 懐れ遠藤兄弟は生田傳八郎の爲め

(然るに以前遠藤家に會ひ悲壯な最後を遂げた

(居た逸平は今は浪花の地に詫しき暮しを蒙る

(居たが遠藤兄弟の最後を知り主君の仇を討た

(るゝ郡山に赴きお花お光の二人と一子惣太郎を

(連れ仇討に出立したのであつた。一方船頭源八

(は罪の苦責に悩まされて遂に入水して果てた。

(惡靈盡きた傳八郎は身の置き所もなく京の地に

(假住ひしたのであつたが遂に逸平主従のために

(見出され茲に主従は本懐を達し得たのであつ

(た。)

(講談種を改作したものとは云ひながら、講談

(趣味より一步も出て居ない脚色振りなので何等

(の恐鎧も得られない平凡な映畫である。脚色者

(が好んで假名を用ひてその責任を免れしん

(するのも無理からぬ事である。場面々々させん

(とも前篇のラストの返り討が僅かに悲壯であつ

(たな云ふのみで他に優れて居る場面さて見當ら

(ない。後篇の最後の仇討の立廻りはキヤメラの

(加減が過ぎて目まぐるしかつた。俳優では尾上

(紋十郎氏が治左衛門と逸平の二役で大車輪であつ

(るが單なる車輪に過ぎない。其他悉く評する要

(なし云ふても大した無禮にもなるまい。ロケ

(実地が使用してあるのは實説である。

(シヨン

事を知らしむるに効果がある。——山本綠葉——
興行價值——機體に舊式な映畫だけ、小むづか
じい所がないから平凡な御客様には解りがはや
くても真からう。
六月廿五日、前篇、七月二日、後篇、大阪芦
邊劇場封切。